

## 女性化されたミッキーマウス

「帝国主義的暴力」と「〈帝国〉的権力」の狭間で

有坂美紀

### 一 はじめに

本稿の目的は、世界恐慌前夜のバブル期<sup>1)</sup>に誕生して以来、グローバル資本主義下において模範的な活躍を続けている、ミッキーマウスにみられるキャラクター表象と、現在も世界のあるところでは続いている女性器切除(以下FGM)<sup>2)</sup>の風習を並置して考察することで、「帝国主義的暴力」および「〈帝国〉的権力」の連続性と断絶を示すことである。より具体的には、現在の新自由主義的志向が暴力的な植民地主義を含むかつての帝国主義を否定しながらも、その残滓にある部分では規定され

ているために、自己矛盾を抱えている様相を明らかにすることを目指している。

キャラクター化およびFGM、この二つの作用は、ともに一九世紀イギリス型の帝国主義に代表される直接的な暴力のあらわれである。また同時にそれは、そうした帝国主義的行為の残滓としての、一般に二〇世紀のアメリカ型帝国主義と呼ばれる、脱中心化された「〈帝国〉的権力」、あるいはかつての帝国主義的行為への抵抗としてのポストコロナリアルな作用のあらわれである。本稿では仮説を立てている。はじめに、ここにおける「帝国主義的暴力」ならびに「〈帝国〉的権力」という語につい

てまとめておく。レイモンド・ウィリアムズによれば、両者の区別は政治的側面と経済的側面の力点の違いにあるという<sup>③</sup>。イギリス型と呼ばれる政治的側面に力点の置かれた帝国主義は、かつての西欧諸国がアフリカを征服した歴史に見られるように、具体的暴力を伴う植民地の直接統治を指すことが多いが、それをここでは、キャラクター化およびFGMという直接的な女性化/周縁化をもたらす暴力とそのあらわれであると捉える。一方で〈帝国〉的権力は、経済的側面を基礎とするアメリカ型帝国主義に象徴されることが多いが、これはかつての帝国主義への批判を下敷きにする。そしてその上で主体化（あるいは規範の自主的な内面化）＝従属化という、心的なものも行為されたものも含めた個々の運動との間に共犯関係を築きながら、あらゆる主体が市場に参入することを促進し、資本を増殖させるのに資する優れた商品であることを潜在的に要求する権力である。この権力形態は、前者に見られるわかりやすい植民者は存在しないものの、先述のような市場化の運動を伴い、絶対的強者という権力の不在を通して、支配者と被支配者との、また敵と味方との区別を曖昧にする。確実に存在しているけれど、実体的見えづらいそうしたネットワーク型権力において、その外部を想像することは困難を伴う。

こうした状況にあってディズニリーゾートは、そこで生まれ

る疲弊した感情やムード<sup>④</sup>に癒しを与える非日常の空間として機能する。誰もが平等で、多文化への寛容さを持ち日常と断絶された「夢の国」という文化的な表象が、人々——彼らは市場を形成してゆくが——の高揚感や癒しへの切望に応えうるのである。しかし、外部なき新自由主義的状况から逃れうるこうしたユートピア的空間こそが、実際には極度に資本化された場所にほかならない。

帝国主義的暴力と〈帝国〉的権力は、今日の癒しを求めるムードを形成しており、それらは一見かけ離れて見えるキャラクター化とFGMの風習の中に確実に存在している。すなわち、権力の新自由主義的変容は、FGMが行われ、それがそのコミューティの外部から非難されるような帝国主義的欲望を伴う伝統的支配空間から、ディズニリーゾートに代表される空間への変容であり、それは外部の想像不可能性をよりいっそうもたらすものである。

## 二 キャラクター化という暴力

本節では、キャラクター化の暴力が帝国主義的暴力と相似であることを指摘する。まず、ミッキーマウスのその詳細なプロフィールを紹介したい。

彼は、世界恐慌前夜の一九二八年一月一八日の日曜日、当時「狂騒の二〇年代」と呼ばれたアメリカはニューヨークで生まれた。性格は「正義感が強くシャイでいたずらっコなところもあるが、礼儀正しくジュエントルマン。とても陽気。好奇心旺盛で楽しいこと好き。しっかりものだが金銭にはルーズな所が見られ」、パイロットや大型トラック等の資格、また赤いスポーツカーを有し、スポーツとカントリライフ、そして読書を大を所有しており、最近の設定では大学にも通っている。そして彼の種類は白ハツカネズミである。

重要なのは、一匹の白ハツカネズミを取り巻く設定ではなく、彼が「アメリカの文化」を保持する「文明化された」ネズミであり、そのネズミはアンタッチャブルではなく、むしろ接触を求められる存在であるということである。ディズニリーゾートにおいて、ミッキーマウスに扮した着ぐるみだが、握手や抱擁を求められる様子は特に日本において珍しいものではないが、この場合に人々は、ミッキーマウスをどのように位置付けているのだろうか。単なる白ハツカネズミでないにしても、彼は人間あるいは動物なのか。またそれ以前の問題として、人間と動物との区別は何によってなされるのだろうか。

神話において、プロメテウスおよびエピメテウスは、地球上

の生き物に対してその能力や力を分配した。そこで人間は、強靱な肉体を与えられた動物に代わって、生きるための知恵と火を付与される<sup>30</sup>。知恵の有無というここに見られる人間と動物を区別する一つの判断基準を、白ハツカネズミであるミッキーマウスに適用したい。一般にネズミは、雑菌の温床とされる不名誉な動物であり、公衆衛生的観点からみてもアンタッチャブルな存在である。それにも拘らず、ネズミであるミッキーマウスとの接触を求めて、ディズニリーゾートを訪れる人は後を絶たない。つまり古代ギリシャの二人の神が人間に分配した知恵は、彼にも与えられており、その意味でこのネズミは人間と同等の存在なのである。ミッキーマウスに限らず、様々なキャラクターたちが、人間から拒否される生物の種類であるにも拘わらず人気を博しているのは、「文化」という人間に特権化された知恵を持つからである。ミッキーマウスは二〇年代のアメリカ的文化を背負った存在であり、それは第一次世界大戦以後の好景気に沸き、世界での存在感を示しつつあったアメリカ像の投影であり、また第二次世界大戦後に名実ともに世界の頂点に立ったアメリカ文化の表象である。赤いスポーツを所有するような都市的な「アメリカの文化」を内面化しているネズミであるからこそ彼には価値があり、その価値はそのまま、現在はおつてほどでないにしても、世界で圧倒的な存在感を誇るアメリカ

カの価値である。この意味において、グローバルスタンダードとしてのアメリカの象徴である彼は、その他のオリエンタルな地の出身ではありえない——それは例えばロンドン出身のハローキティにも同様に。そのとき、一見偶発的にみえる出身地は彼／女のアイデンティティとして本質化され、巧妙に設定されることとなる。

「文化」を保有し、人間との境界が曖昧化されるこうしたキャラクターは、「文明化された」西洋の出身であることが特にごく最近までは重要であり、ミッキーマウスもハローキティもそれに忠実である。出身地の重要視ひいては本質化は、社会的な階級と生物学的な階級——それ自体構築物であるとしても——との同一視をもたらずが、それによってこの二つの階級は「血統」に回収される。例えば、現在まで残る同和地区は、住人と住人以外の差異が人為的な作用の結果に過ぎないにも拘わらず、それが属血的なものと同連付けられて自然化され、差別されてきた歴史が残っている——キャラクターの場合、それとは反対の作用であるが、属地による属血決定は社会的なコードとして根強く残っている。そのあらわれの一つとして、美容整形に対する批判や今日の反知性主義にみられる決定論的現象があり、それは結果的に階級の流動性を否定する。つまりミッキーマウスが「いたずらっこだけれど礼儀正しいジェントルマン」であ

り、「金銭的にルーズなところが見られ」という設定を通して、彼の像と当時のアメリカの価値および表象が同一視される。こうして彼が文化ごと愛されるとき、社会・経済的に周縁化されていたもの、例えば有色人種や性的少数者（ミッキーマウスにはミニーマウスというかわいい彼女が存在する）、は模範的アメリカの不要部分として不可視化されると同時に自然化される——さらにこの「文化」は属地と属血が接続され混同されることで、決定論的要素として特権化される。彼が大国アメリカの中産階級であるのは、偶然による彼の「生まれ」に関わるものであり、それは流動的な社会的階級によって混合されることのない「純正アメリカン」を構築する——一見ユートピア的なディズニールードは、こうした周縁化およびその不可視化に支えられているのである。

キャラクター化の成立とおよび人間と動物の間の境界を曖昧化する作用は、こうした周縁化の作用を通して伝統的な帝国主義的行為の中に書き込まれている。ディズニールードで出会うミッキーマウスがアンタッチャブルな白ハツカネズミのイメージにそぐわない存在であるのは、身体的接触の排除に起因する心的作用の介在に依るところが大きい。それは性的接触の排除でもあり、性的なものをも含むあらゆる接触の排除は、帝国主義的な「文明化」の暴力である。なぜならその暴力とは、

「文明化された」文化を保持する主体の構築であり、人（白ハツカネズミ）は「文明化された」文化によって近代化するという幻想だからである。この心的作用が、文化の保有、すなわち神に与えられた知恵を持つ者と持たざる者との間の決定的な断絶を前提とするものであり、「非文明の」主体との接触可能性を想像させるものであり、同時に「文化」を保持するものに対する「人間」の寛容さである。その寛容さは、非文明の主体が、もともと文化を保有する「われわれ」との同志としての親密性を形成できないことを示している。というのも、非文明の主体であるネズミが、文化の付与によって模範的グローバルアクターであるミッキーマウスへと華麗に転身する際に、彼が果たすべき役割は人々を癒し楽しませるといふ情動労働<sup>⑥</sup>に他ならぬ。

ここにおいて不均衡な力関係の中で情動労働を割り当てられるミッキーマウスという主体は、周縁化された存在の自然化と不可視化によって成立していながらも、一方で彼そのものが女性化され従属する地位に置かれていたのである。キャラクター化が文明化という帝国主義的暴力によって達成され、それが〈帝国〉的権力およびそれを支える新自由主義的市場のネットワークへと接続されていく地点は確実に存在しているのだ。赤いスポーツカー等に見られる近代的で都市的な文化を持つ白ハツカネズミという表象は、二種の去勢という暴力の介在によっ

て成立する。それは一方で、不快なイメージを喚起するネズミの身体性や生身の生物性を捨棄され文化を持たされることであり、他方では、それによって初めて市場の承認を受けたミッキーマウスが情動労働に従事させられることである。

こうした女性化する者／される者、あるいは消費する者／される者との間の不均衡な関係は、消え去ることなく残っている。それは、文化の付与を通して文明化・啓蒙活動を行い、近代的市場の承認をもたらすと同時に資本主義経済の内部へと誘う者と、こうした一連の作用を、「文明人」になるための洗礼として受け取る者との関係である。そしてこれらは、前者のいる資本主義的空間への後者の招き入れであり、同時に市場が主体となった帝国主義的行為による〈帝国〉化の作用である。

### 三 帝国主義的／〈帝国〉的作用としての文明化

現在でも世界のいくつかの地域では行われているFGMは、暴力的風習としてしばしば非難を浴びている。FGM研究の先駆けであるとされるフラン・P・ホスケンは、この風習について文化的背景から少女たちの健康状態に関わる詳細なレポートをWHOに提出し、それを数度にわたって更新している。彼女によれば、この風習の本当の目的は、「性的快感を弱めたり、

なくしたりすることで、女性を男性の性的支配の下に置くこと」であり、「そのため男性は手術をしていない女性と結婚することを拒む」<sup>77</sup>。この暴力的な風習は、男女双方の主体化<sup>78</sup>に従属化によって維持されているが、未婚女性の性的接触が構造的に排除されているという点で、これはつねに女性化されているミッキーマウスを取り巻く状況と部分的には同様に捉えることができるだろう。

ホスケンによって提出された、FGMに関する一連のレポートは、その風習が現在も行われているということを世界に周知させ、問題化したという点で非常に高い評価を得ているが、同時にその普遍的人権主義の下での横暴さを指摘する声も少なくない<sup>79</sup>。FGMに対する反応としては大まかに、それはホスケンのような普遍的人権主義からの批判と、こうした立場を西欧的価値観の押し付けけであるとして批判する文化相対主義との二通りがある。今日のフェミニズムにおいては、この二項対立そのものを問題化し、内在する経済的不均衡の問題としてこれを捉え直す必要性を説く立場が散見される<sup>80</sup>。こうした彼女の仕事とそれに対する様々な応答を踏まえ、以下ではFGMという風習の是非を問うよりもむしろ、それを可能にする暴力のかたちと、「文明社会」による批判が双方とも力関係の不均衡によって生じた帝国主義的暴力であること、さらにそこからの解放

の先にある世界が、同様の不均衡が解消されないままさらに不可視化される〈帝国〉的空間であることを示したい。

ホスケンのレポートによれば、それは主に女性に対する性的支配を目的とする。貞淑な女性のみが承認を付与され、さらにそうした了解を各人が内面化しているコミュニティにおいては、男性も同様にこの構造的風習から逃れることができない。FGMは、規定された「妻になりうる」条件をコミュニティ内の男女双方に内面化しているため、女性に対する男性の単なる暴力として片付けることはできないのである。この構造は二重の従属化を伴っており、それは一方で男性がこれの担い手となることで強化する女性に対する従属であり、また他方では、コミュニティの成員として承認されるために不可欠な同風習への従属である。岡真理は「ポストコロニアル・フェミニズムや第三世界フェミニズムという呼称は、従来の普遍的フェミニズムに対して、限定詞つきの、特殊なフェミニズムであるかのような印象を与えるかもしれない」<sup>81</sup>とする。彼女の言及は、こうした衝撃的な風習が明らかになり、第一世界と第三世界の女性間における明らかな差異が見出された結果、女性間の横断的な連帯が困難となったことの指摘であるが、その困難は主に経済的不均衡に依る。同様の構造による被抑圧経験を潜在的に持ちながらも、経済的な階級格差がその捨象を可能にするのである。実

際、同国内の距離的に近いコミュニティであっても、富裕層の少女は手術を免れるという事実がある<sup>①</sup>。現地の富裕層では、経済的な理由から結婚する必要がないために、貞淑な女性像という規範に従いそれを内面化して、施術を受ける事態を避けることができる。こうした風習を実際に行う多くが、経済的に豊かではないために保障としての結婚を求める少女たちであり、それはFGMが単なる文化的差異の問題ではなく経済的問題であると同時に、経済機能を担っている政治の問題であることを示している。つまりFGMを受けることは、結婚を生存の手段とする女性の男性に対する従属であり、それは父権的な「文化」によって構造化された経済格差に他ならない。と同時に、そうした男女間の非対称性は、FGMが継承されている特定の地域やコミュニティ内で完結しうるものではなくそれを解消できない政治的問題であり、その政治的なものはまた当該国民国家の未熟な政治的技術だけでなく、時空間における横断的な視点から捉えられるべきものである。ここにおいてFGMの風習が示すのは、地理的・時間的な広がりを含む、より広範な父権的権力である。

そうした権力の下では、結婚して妻となるために手術を経た性的に無垢な女性であることが必要であり、その手続を通してのみ当該コミュニティにおいて妻になりうるものとしての承認

を獲得することができる。純粹性を担保することが生存の手段となる未婚女性に対するこうした性的接触の構造的排除は、結果として望ましい／ありたい模範的女性像を構築し、そのとき過剰に女性化された女性像が要請されると同時に生産される。

また、キャラクター化にあっては、身体的接触の捨象という作用によって白ハツカネズミのように本来商品になりえない主体に市場への参入と承認の可能性が拓かれ、イノセンスの指標を介して癒しを与える像としての情動労働を割り当てられる。ここにおいて、当人の主たる生存空間における承認への欲求および規範への主体化<sup>②</sup>従属化という点で、キャラクター化とFGMは並立して捉えることができる。キャラクター化の暴力と実際に人間の身体が切除される暴力とを同列に述べることは、確かに乱暴であるかもしれないが、前者は市場において、そして後者はコミュニティにおいて承認を求める外的かつ心的な運動が、接触の排除という手続を可能にしており、それによって承認されうる自己<sup>③</sup>が達成されるという点で、二者の構造は酷似している。いずれの場合にも、承認の根底には経済的なものが存在し、その意味においてFGMは直接的な帝国主義的暴力の発露であるばかりでなく、コミュニティにおいて排除されない承認される主体になるための心的要請に支えられた、〈帝国〉的な作用を持つものである。

こうした文脈を通して継承されるFGMは、その背景の不可視化を伴いながら、特に西欧諸国からの批判に常に晒されている。ホステンのレポートやそのナラティブについてしばしば指摘されるその啓蒙主義的姿勢は、FGMを経済的・政治的要素を欠いた文化的・民族的問題として捉えることへの批判であり、「野蛮で非人道的な」行為を正しく導こうとする「文明」という二項対立的な近代的価値観に対する批判である。そして同時に、こうした「人道的介入」は、FGMという帝国主義的な抑圧とそれを解消するオルタナティブとして働きうる〈帝国〉的空間の間の結び目として機能しているのである。

既に述べたように、FGMを可能にするのはコミュニティの構成員自身による従属の内面化であると同時に、権力関係の差異を構築する政治・経済的問題であり、そこには通底する父権的権力の存在がある。近代化された資本主義社会であれば市場、またFGMが行われている文化圏内部ではコミュニティと、それぞれの空間において優れた主体となることが構成員は求められるが、彼ら自身の行う規範の内面化は、「文明社会」と「未開社会」に同様の支配的構造の下で継承されている。後者の場合にそれは、結婚を望む／せざるを得ない少女たちの当該市場への参入を可能にする通過儀礼であり、前者がこの風習を否定することは、彼女らの身体の保護という効果ばかりでなく、近

代化された文化を共有することで参入が可能になる、自由な資本主義市場への招き入れという帝国主義的意味合いを持つ。帝国主義的で人道的なこうした介入がその内部に矛盾を抱えるのは、二つの帝国主義的暴力（コミュニティ内部でのFGM、および欧米によるFGMの否定）を可能にする父権的な要請と、〈帝国〉的権力のもたらす優れた主体になるという欲望が連続性を持つからである。実際のところ、殊に先進国において醜形恐怖症や摂食障害など自らの身体を「改良」することで優れた主体になろうとする欲求から生まれた症候は、決して一般的なものではないにしても存在する。こうした症候は、欲望される優れた自己を志向する個々人の自主的な内面化であると同時に、市場の要請によって規定されている。その要請は市場を父権的に構成し支配する権力<sup>⑧</sup>によるものであり、そこで作用する権力関係の構築と維持は、歴史的観点から捉えられるべきものである。女性化／周縁化という身体への広義の暴力は、コミュニティや市場に代表される主たる生存空間内での生きやすさと共犯関係を結び、その共犯性は帝国主義的暴力と〈帝国〉的権力のそれである。というのも後者は、直接的植民地主義である前者の残滓であると同時にそれに対する批判を内包するけれど、従属の内面化という点で前者と共通しており、さらにそこで生じる権力関係がかつてのまま不可視化され固定され続けている

のである。

共犯関係がこのように不可視化されていることは、例えば一九世紀から二〇世紀初頭にかけて帝国主義的行為のもたらした言語や教育等の諸々の政策が、過去の被植民地においていまだに反映されている少なくともいさなから見出せる。こうしたかつての帝国主義的暴力は非難の対象となる一方で、新自由主義の先鋭化した今日において偶然にも——あるいは構築された必然において——市場が求める主体の生産に貢献するという理由から、植民地域にその恩恵をもたらししていることは否定できない<sup>14</sup>。それは、例えばささきの醜形恐怖症や摂食障害が美容整形等の身体的改良をもたらし、結果として優れた身体を手に入れ市場の承認を享受した際に、そのような〈帝国〉的権力が不可視化され、その外部の想像可能性が捨棄されることと同様である。帝国主義的暴力から〈帝国〉的権力へのこうした接続は、それぞれの空間内での権力関係の連続性によって実現し、二者が連続性を持つこの接続地点において、先進国で散見される右の症候とFGMは、固定化された父権的権力の要請に応えるという点で同様の意味を持つ。そのとき、コミュニティ内の風習は批判されないまま継承されていく。FGMを受けることで市場への参入すら許されない「あばずれ」から、求められる主体への「出世」の道が拓く。しかし、生存の保証としての結婚を

実現した女性が自らの成功体験に基づいてFGMを文化的風習だとするとき、そこでヘゲモニックにはたらく伝統的な権力関係は隠蔽される。「文化」が経済によって形成され下支えされていることは捨象され、文化の純正さのみが残存する。そしてその純正さは、経済活動から切り離された純朴な主体という第三世界のイメージ<sup>15</sup>を規定すると同時に承認し、承認が再配分の忘却と交換関係を結ぶとき、その非対称な関係は否定されないまま維持される。帝国主義的暴力と〈帝国〉的権力の連続性は、このようなヘゲモニックな権力の継承の内部にあり——そしてそれは多分に父権的であるが——同時にその要請を各人が内面化することを通して不可視化され、固定化されるのである。

一方で、同時にこの二つの権力の断絶も存在する。確かにこの二者は連続性を持ち、そこに存在する見えざる作用こそが今日の外部なき世界を規定しているけれど、両者の要請はある点で異なっている。それが過度に市場化された〈帝国〉的空間が隠蔽する、FGMに見られるような規範的図式の不在というイデオロギーであり、参入障壁の消失というユートピア的幻想<sup>16</sup>である。

〈帝国〉的空間においては、既に市場の内部にいる個々の主体が、高い商品価値を持つ魅力的な主体であることを要請される。

ここでは、自らの身体的特徴や人種、被抑圧的なコミュニティおよび国家が独自の商品として、許容できる範囲にある限りにおいて、排斥されるどころか市場の歓迎を受ける。こうした空間において、貧しい少女は手術を拒否し、また白ハツカネズミは赤いスポーツカーに乗らない自由がある。だが非合理的な風習からの解放は、主体自身の真の解放とは必ずしも一致しない——それは風習を一つのバリエーションとして、通底する権力に規定され続けている。〈帝国〉的権力において保障されるこうした選択の自由は、二者の間で連続する権力関係を脅かさないう限りにおいてである。それはかつての規範的な男性像（白人・男性・ヘテロセクシュアル）対して情動労働を行う、女性化によって構築されたミッキーマウスという主体への許容であり、FGMという極度に女性化された経験が、特権化されることで市場の承認を獲得することに等しい。つまり、両者はそれぞれ、「情動労働の担い手である女性的な主体」と「悲惨な記憶を持つ保護すべき主体」である点で、さきの支配的な規範と競合する主体ではなく、女性化／周縁化されたそれである。彼／女らが自由を享受するのは、この女性化された主体という枠組みの内部に限定されており、そこにおいて被差別や被植民の記憶は「保護されるべき主体」というイメージを伴いながら、高い商品価値を生む。商品化された記憶や体験が個人の物語か

ら集団の歴史へと置き換わり、「共通の経験を持つコミュニティに属すること」が商品価値を持つとき、その集合体には同じ痛みとルサンチマンを共有する本質化されたアイデンティティが生み出される<sup>10)</sup>。この作用は、個々の多様な記憶を許容し多様なバリエーションとして歓迎すると同時に、女性化／周縁化された主体を本質化する。こうした主体の形成は、帝国主義的暴力における父権制という権力の再生産を可能にし、その不可視化によってその権力作用をより強化するのである。

#### 四 優れた商品の生産を目指して

帝国主義的／〈帝国〉的権力内部においてその支配的地位を維持してきたこうした父権的権力は、白人・男性・ヘテロセクシュアルという規範を継承する遺物であると同時に、そのナラティブにおいて構築された人為的なものである。また、こうした規範的主体を設定することによって、規範からはずれた主体を望ましくないものとして周縁化することが可能となる。この意味において、現在の新自由主義的状况における望ましくない主体は支配的な父権的権力の効果であり、父権制というその政治的決定から生じた経済的問題は、個々の優れていない主体の問題として捉えられる。規範的主体の構築の結果生まれた経済

格差が、規範に合致しない個別の主体の問題として捉えられるとき、規範そのものは是非は問われることなく生き延びていく。同時に経済的な非対称が政治的な非対称へと拡大することで、各々の主体性および彼ら自身に対する愛着は強化される。「あなたが誰であるのか」を問われ、主体を管理・改善することを求められる新自由主義的状况において、帝国主義的欲望から生まれたこのような非対称は、歴史的・社会的文脈を捨象することによって、フラット化に向かうどころか、その不均衡を不可視化しながら深化させているのである。

とりわけディズニリーゾートに代表される空間は、夢の国として称賛されるが、それはバスポートを購入しさえすれば、誰もが平等にホスピタリティを享受するという点で多分にユートピア的である。この空間は日常的な様々な支配関係を中断させることで癒しを与える夢の国であると同時に、特区政策等に見られる例外状態である<sup>18)</sup>。それらはいずれも平等性が担保されている点でユートピア的に見える——新自由主義的例外空間では、誰もがアメリカン・ドリームに挑戦する資格があるのだ。しかし、こうしたユートピアは幻想であり、それはあらかじめ設定されている権力関係の内部で——しかもその関係に従属していることを主体自らに悟らせずに——許容される範囲内の競争と自由を保障しているに過ぎない。

ナンシー・フレイザーとアクセル・ホネットの間の再配分と承認をめぐる論争において、ホネットはあらゆる不均衡の起源を承認と位置付けており、その尊厳の回復こそが眼前の望ましくない事態の是正には急務だとする<sup>19)</sup>。彼のテーゼが重要であることに間違いはないが、承認を基礎としながら非対称を是正する際に問題なのは、外部の想像が困難であることだ。承認をめぐる運動には必ず、承認を付す側と承認を付される側が生まれ、両者の力関係は元来非対称である。かつて存在していた<sup>20)</sup> 自らの承認を求める対象、承認の対象となるものに関する強固な規範的図式<sup>21)</sup>は、新自由主義下において不分明である。これは規範の不在を意味せず<sup>22)</sup>、多元主義的価値観の普及と直接的な帝国主義が身を潜めたことによる「解放」の結果、個々のアイデンティティが「(父権制権力において)どこまで承認されるか」が主要な問いとなる市場の関心の変化である。かつての明確な図式が不可視化されたために——それは無論存在し続けているけれど——、従来承認されえなかったような主体であっても、抑圧されるどころか個性として市場から歓迎されうる——例えばクイアな芸人や第三世界のアスリートが称賛される気を博すように。彼らの得ている、身体性を含むアイデンティティの商品化に対する承認は、規範によって創造された市場においてなされており、被承認という社会的位置づけに実質的な

変化はない。このような承認が与えられるのは、彼らが商品価値を持つ優れた存在であるためではなく、多様さを許容する寛容さを持つものへ市場が成熟したためである。ここで達成される新たな主体／アイデンティティへの承認は身体性を伴っており、それはコミュニティ内の承認を得る目的で手術を受ける少女や、身体的接触の排除と文化の付与によって市場の承認を得るキャラクターと、ときに暴力を含む身体の商品化を行う点で共通する。身体の商品化は、身体性が商品価値を持つことと同時に、身体以外に承認の手段を持たないことを示している。

ただし、FGMを受ける少女及びキャラクターの二者と、そしてクイアな芸人にみられるアイデンティティを商品化する主体には差異があり、それは市場への参入以前と以後の差異である。後者をめぐる状況において新自由主義的権力は一層深化しており、それはかつての規範的図式の不可視化に依る。このとき主体は、自己のうち何を商品化するかの決定権を持つが、それは市場価値を持たないかもしれない恐怖との戦いであり、再配分がなされなければならない恐れへの挑戦である。この恐怖が示すものは、自分の身体及びアイデンティティのうちどこまでが許容され、隠蔽され通底する規範に合致するのかが不明瞭であるために生じる疲弊であり、また規範的権力に対する潜在的な恐れによって擦り減らされていく自らの身体と精神の感覚

である。ここにおいて、商品の価値判断は、新自由主義的な市場の偶発性<sup>⑤</sup>——そしてときにそれは社会的階級への拡張をも意味する——の顔をした帝国主義の遺産に委ねられている。確かに市場では予想外のことが多分に起こる——しかしこうした蓋然性や偶然性は、そうした偶発的現象をも内包した市場を規定する規範的権力の内部で起こっており、市場の神秘性が強調されるほど、その権力は不可視化されてゆく。

身体性に留まらず文化的・経済的背景に至るまであらゆるものが商品化される新自由主義的な空間は、実際は神秘的で自然に則した場所ではなく、それ自体が一九世紀の直接支配型帝国主義時代以来の規範的価値観を暗に保持している。それは白人・男性・ヘテロセクシュアルという強くてたくましい主体の中心化であり、文明社会という幻想であり、父権制という非対称な図式である。横断的に継承されてきた社会的に優位な階級は、新自由主義的〈帝国〉において一層の資本の蓄積を可能にし、その成功はかつての権力関係を強化し、また市場の偶発性の名の下で不可視化する。それは帝国主義的暴力と〈帝国〉的権力が接続される地点であり、こうした図式に市場の作用が完全に取って代わったように見える空間である。新自由主義は、それが継承する非対称な価値観と同時に批判されることではじめて、その外部を見出す可能性が拓かれるのである。

- (1) 第一次世界大戦によってもたらされた好景気に沸き、かつ世界恐慌前夜である「狂騒の二〇年代」と呼ばれた時期を想定している。
- (2) この呼称について。「女子割礼」等の様々な呼称があったが、一九九〇年に開催されたインター・アフリカン・コミッティ(IAC)の総会において、女性器切除(Female Genital Mutilation)という名称を用いることが決定されたという経緯があるため、本稿では以下FGMの表記で統一する。
- また、国際連合児童基金(ユニセフ)によって出された二〇一三年の報告によると、現在、二九か国で一億二千五百万人以上の女性が施術を受けているという。FGMを事実上廃止する国家も存在するが、例えばソマリア、ギニア、ジブチ、エジプトにおいて、十五〜四十九歳の女性のうち九十%以上がFGM手術を受けていると報告されている。
- (3) とはいえ、彼によると、実際のところ帝国主義それ自体が経済システムであることを前提としているため、たとえ独立等によってその政治的な部分が撤退しても、その経済的な残滓は依然として被植民国を支配し続けるのである(レイモンド・ウィリアムズ『完訳 キーワード辞典』椎名美智、武田ちあき、越智博美、松井優子訳、平凡社、二〇〇二年)。
- (4) デヴィッド・ハーヴェイによれば、新自由主義は、「何よりも、強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で個々人の企業活動の自由とその能力とが無制約に発揮されることによって人類の富と福利が最も増大する」とする政治経済的実践の理論である(デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義 その歴史的展開と現在』渡辺治監訳、作品社、二〇〇七年、一〇頁)。それによって「一般市民のレベルでは、市場の自由に対する信仰とあらゆるものの商品化が(……)席卷し、社会のまとまりが崩れるという(同書一一四頁)」。プラトン『プロメテウス』藤沢令夫訳、岩波書店、一九八八年、四四頁。
- (5) 非物質的労働の一形態としての情動労働は、「安心感や幸福感、満足、興奮、情熱といった情動を生み出したり操作する労働」であり、「具体的には、弁護士補助員やフライトアテンダント、ファーストフード店の店員(笑顔のサービス)」である。ただし非物質的なのはあくまでその生産物に限られる(アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート著『マルチチュード』上(「帝国」時代の戦争と民主主義)幾島幸子 水嶋一憲 市田良彦訳、NHK出版、二〇〇五年)。
- (6) フラン・P・ホスケン『女子割礼 因習に呪縛される女性の性と人権』、鳥居千代香訳、明石書店、一九九三年、九二頁。
- (7) 作家であり活動家であり、そして内科医かつ精神科医であるエジプト出身のナワル・エル・サーダウィは、FGMをめぐる西欧諸国フェミニストの援助について、植民地主義の偽装として世界(ナワル・エル・サーダウィ『イヴの隠れた顔——アラブ世界の女たち』村上真弓訳、未来社、一九八八年)。その意味において、ここにおける普遍的な人権主義は近代的な西洋中心主義を投影するものである。
- (8) 岡真理「同じ」女であるとは何を意味するのか『性・暴力・ネーション』、勁草書房、一九九八年。

- (10) 同前二二一頁。
- (11) 同前二二八頁。
- (12) ここでの「承認されうる主体」は、市場の歓迎を受ける者というよりはむしろ、ある一定の条件を充たすことで市場への参入が許された、不完全な寛容 (tolerance) の対象となる存在である。
- (13) 父権制においても明確な権力者の存在があるのではなく、それは様々な制度や市場と結びつきながら権力関係を構築する。「父権制は、世界における大多数の社会経済的システムになくしてはならない社会的編成の歴史的に変化する形態であり、それはずっと資本主義の搾取的な人間関係に根本的なものであり続けらる (Patriarchy is a historically variant form of social organization that has been necessary to most socioeconomic systems in the world and has been fundamental to capitalism's exploitative human relations)。」Hennesy, Rosemary. *Profit and pleasure: sexual identities in late capitalism*. New York: Routledge, 2000. (拙訳)
- (14) 植民地支配に際して行われた教育や近代的価値観の流入が解放・独立後を経て現地に残ることができていることを想定している。具体的には、当時の言語教育の充実が、現在のグローバル化した世界に要請に応えうる主体を生み出したこと等が挙げられる。
- (15) 政治・経済的で唯物的な男性主体と家庭的で精神的な女性主体というジェンダー表象のイメージが、第一世界と第三世界のそれと重ねて述べられる事態をここで想定している。
- (16) 参入障壁は確かに消失したかもしれないが、それは参入したからといって誰もが「売れる」わけではないという意味でユートピア的だといえる。
- (17) ウェンディ・ブラウンは、ルサンチマンの記憶がアイデンティティとして内面化され、それが従属の作用を強化することを指摘している。
- 「ルサンチマンによって構築されたアイデンティティは同時に、自身の従属におもて付与されるようになる (Identity structured by resentment at the same times becomes invested in own subjection)。」Brown, Wendy. "Wounded Attachments" in *States of Injury: Power and Freedom in Late Modernity*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1995. (拙訳)
- (18) ディズニリーゾットはミッキーマウスの女性化という帝国主義的作用に加えて、それによって生まれた彼のパーソナリティが資本の蓄積を可能にしており、経済特区においては「伝統的な不均衡を瓦解する意味では有効であるけれど」、そこで中心をなす労働が、イノベーションに代表されるような個々のひらめきや能力に依拠している点で共通している。ディズニリーゾットはミッキーマウス(やその他のキャラクター)の魅力によって成立しており、彼が単なるハツカネズミのままであれば、この空間は存在しえない。
- (19) ナンシー・フレイザー アクセル・ホネット『再配分が承認か?』加藤泰史監訳、法政大学出版社、二〇一二年。
- (20) 帝国主義的暴力によって生産された規範が可視的に有効な範囲を想定している。
- (21) これ以降の「図式」は、異端とされる規範からの流出は、正統という規範的図式に包摂されることを含意しており、その意味で画像に対置されるものとして位置付けている。これは主に、マルティン・ハイデッカー『カントと形而上学の問題』(門脇

卓爾訳、創文社、二〇〇三年、九八一―一七頁）に依拠している。

(22) 過度に市場化された世界において評価されるのは、資本の蓄積者であり、その手段を持つ人材だが、もともとの固定された権力関係によって市場が形成されているため、その解体は形式的なものに過ぎない。

(23)

私がある社会的地位にあることは単に偶然に過ぎないけれど、その偶然性によって社会関係が規定されていく状況を想定している。また、ある商品が売れるのはそれが内包する魅力が理由であるが、売れない理由は偶然に還元され、同時に受け容れられない経験も偶然性に依存することになる。

(ありさか みき／修士課程)